

さけます情報

北太平洋と日本におけるさけます類の資源と増殖

佐藤 恵久雄 (北海道区水産研究所 業務支援課)

2010年の北太平洋

漁獲数

第19回NPAFC年次会議における各国の報告によると、2010年1-12月の北太平洋の漁獲数は4億2,305万尾で、前年の6億556万尾と比較して70%となりました(図1A)。

これを魚種別に見ると、カラフトマスが最も多い2億5,874万尾で全体の61%を占め、前年の4億3,542万尾に対し59%と減少しました。次いでサケが9,104万尾(構成比22%,対前年比84%)、ベニザケが6,547万尾(構成比15%,対前年比120%)と続き、これら3魚種で98%以上を占めています。ギンザケとマスノスケは、それぞれ633万尾(対前年比100%)、137万尾(対前年比130%)となりました(図1A)。

地域別では、ロシアが1億8,149万尾と最も多

く、以下、アラスカ州1億7,175万尾、日本5,412万尾、カナダ1,146万尾、WOCI(ワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州)418万尾、韓国6万尾と続いています(図1B)。

人工ふ化放流数

2010年1-12月に人工ふ化放流された幼稚魚数は52億4,351万尾で、前年の48億1,074万尾と比較して109%となりました(図1C)。

魚種別ではサケが31億7,484万尾で半数以上を占め、これに次ぐカラフトマスの14億4,519万尾と合わせると全体の9割近くを占めます(図1C)。

地域別では日本が20億1,158万尾と最も多く、以下、アラスカ州15億5,960万尾、ロシア10億3,353万尾、カナダ3億1,255万尾、WOCI3億909万尾、韓国1,719万尾と続いています(図1D)。

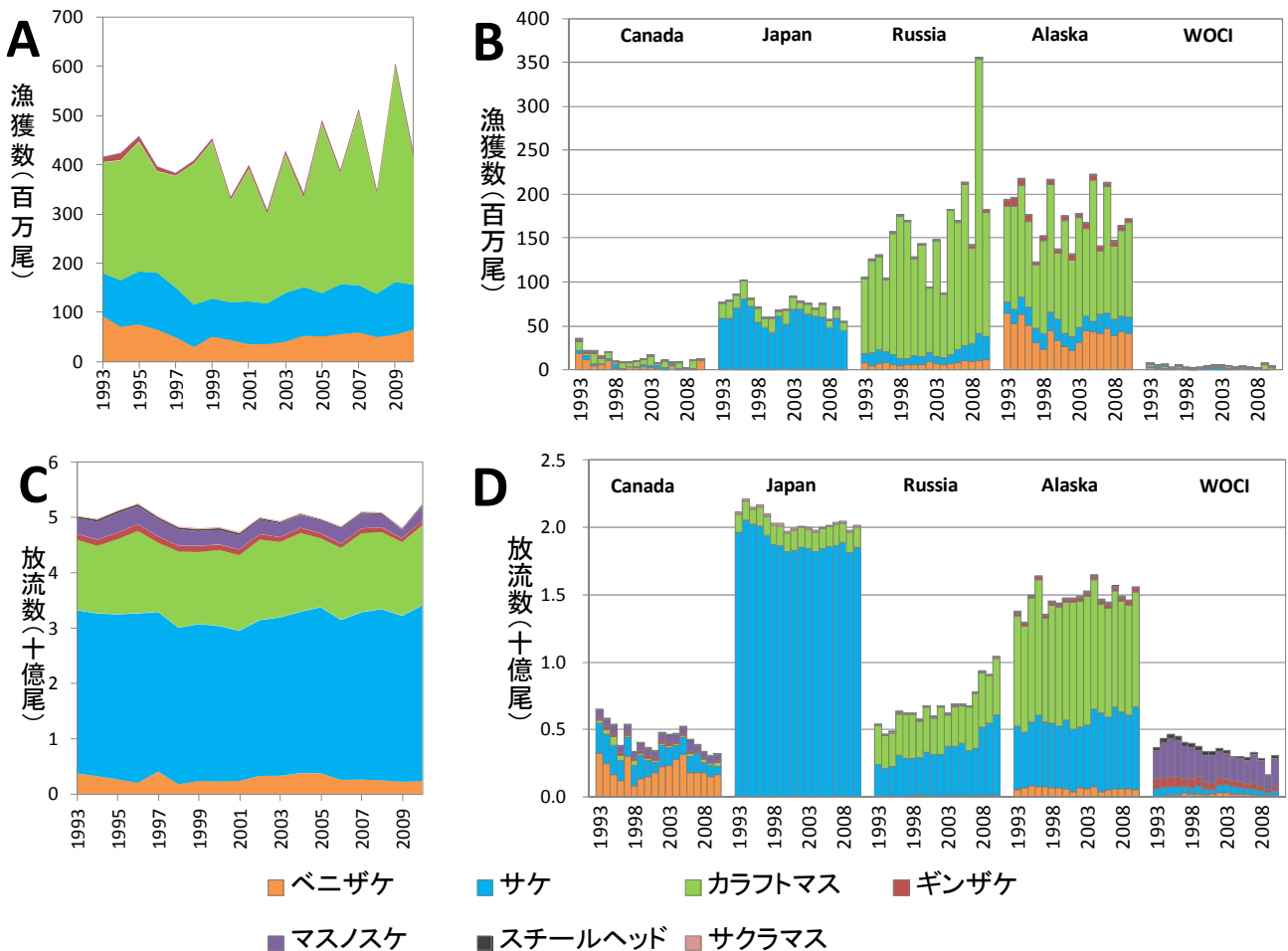


図1. 北太平洋におけるさけます類の魚種別漁獲数 (A)、地域別魚種別の漁獲数 (B)、魚種別人工ふ化放流数 (C) 及び地域別魚種別の人工ふ化放流数 (D)。1994-2008年は「NPAFC Statistical Yearbook」による確定値。2009年以降はNPAFC年次報告等で示された暫定値。1998年までのロシアにはEEZ(排他的経済水域)で他国が漁獲したものを含む。WOCIはワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。韓国は他国に比べ漁獲尾数・放流尾数ともわずかなため、図中では省略している。

2011 年度の日本

サケ

2011 年度の来遊数（沿岸漁獲と河川捕獲の合計）は 12 月 31 日現在で 4,329 万尾、前年度同期比 88% となっています（図 2）。地域別にみると、北海道は前年同期比 94%、本州は同 62% と本州の減少が大きく、また、両地域とも日本海側に比べ太平洋側の減少が大きくなっています。

総採卵数は 12 月 31 日現在で 19 億 65 万粒、前年同期比 90% となっています。北海道では定置網漁業の自主規制など、成魚を河川へ上らせるための対策が功を奏し、ほぼ計画どおりの種卵が確保されたものの、本州では計画を満たすことは困難とみられ、放流数も減少することが予想されます（図 2）。

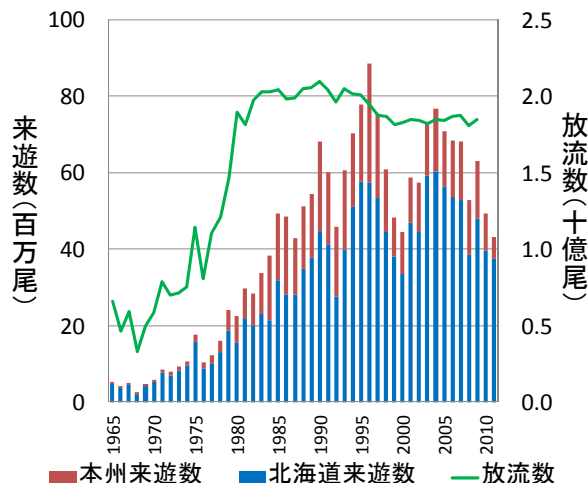


図2. 日本におけるサケの来遊数と人工ふ化放流数. 2011 年度来遊数は12月31日現在.

カラフトマス

主産地である北海道における 2011 年度来遊数は 553 万尾で前年度比 76% となりました。カラフトマスは来遊資源が隔年で変動する特徴があり、2003 年以降、奇数年は豊漁年にあたっていましたが、今年は近年の不漁年で最も少なかった 2006 年をも下回る来遊数になりました。

総採卵数は 1 億 5,727 万粒、前年度比 91% と計画数に満たず、放流数も減少するものと見込まれます（図 3）。

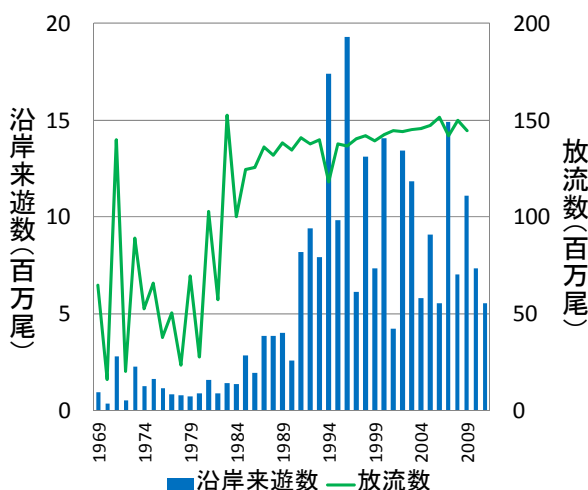


図3. 日本におけるカラフトマスの来遊数と人工ふ化放流数.

サクラマス

2011 年度の北海道における河川捕獲数は 17,606 尾で前年度比 334% と大幅に増加しました。しかし、河川の増水による親魚の逃避などがあったため、総採卵数は 278 万粒で前年度比 86% となりました。なお、2010、2011 年度の本州河川捕獲数については現在確認中です（図 4）。

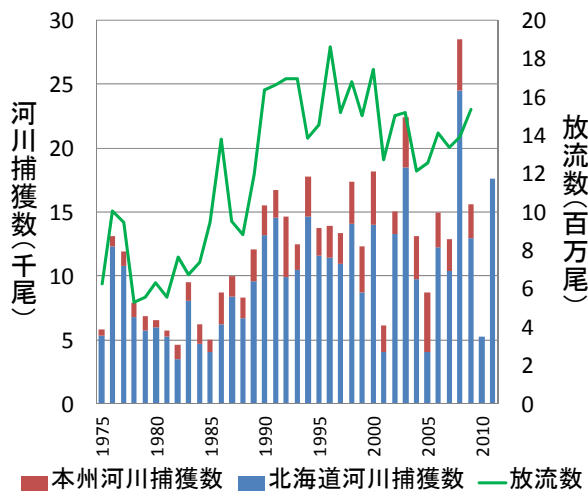


図4. 日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数. 2010-2011年度の本州河川捕獲数は確認中.

ベニザケ

2011 年度の北海道 3 河川（安平川・静内川・釧路川）における河川捕獲数は 1,241 尾で前年度比 115% となりました。